

# 茗溪会賞(社会貢献活動功労者)顕彰者一覧

(順不同・敬称略)

## 団体

高校生が、被災者を励ますメッセージ入り雑巾の寄贈 作新学院(代表生徒 駒田 祥史)

「地あぶら」で地域の潤滑油になれば NPO法人「バイオライフ」(代表 塩川 富士夫)

おばあちゃんの生家から広がる人の縁 NPO法人「華の幹」(代表 飯塚 洋子)

筑波大学生の力を生かした地域密着型復興支援 T-ACT企画「Tsukuba for3.11」  
(代表学生 福井俊介)

高校生によるラオス学校建設への協力、支援活動 高知市立高知商業高等学校生徒会  
(代表生徒 細木 優夏)

## 個人

木製義足を作り続ける職人 菊池 豊

ご当地紙芝居で心の復興後押し 中谷奈津子

言葉の橋渡し 心を添えて 問屋 正勝

音楽を通じた日本とモンゴルの交流拡大をめざして 阿部 渚

子供達に生きた科学を 芳賀 和夫

地域での一人暮らしの方やお年寄りの見守り活動 藤原 啓乃

# 高校生が被災者を励ます メッセージ入り雑巾の寄贈

作新学院

代表生徒 駒田祥史（栃木県宇都宮市）

作新学院高校ボランティア部は、阪神大震災などをきっかけに創部した。現在は、2、3年生18人が所属し、募金活動や高齢者や障害者の自宅を訪れ、窓拭きなどの活動を行っている。東日本大震災後は、2回にわたり宮城県七ヶ浜町の仮設住宅を訪れ、窓拭きに汗を流した。その際、部員が雑巾を住民にプレゼントしたところ「すごく助かる」と感謝の声が多く寄せられた。この経験を踏まえ、ボランティア部は生徒会等と話し合い、仮設住宅に大量の雑巾を贈ることを計画し、全校生徒だけでなく、中等部、小学部等にも協力を呼びかけ、目標としていた五千枚を上回った。雑巾には「笑顔に花を咲かせましょう」など思いがこもったメッセージが記されている。今後は、更に七ヶ浜町以外の被災地への贈呈も検討している。



# 「地あぶら」で地域の潤滑油になれば

## NPO法人「バイオライフ」

代表 塩川 富士夫（茨城県龍ヶ崎市）

NPO法人「バイオライフ」は、地域の衣食住とエネルギーを自分達で作り出そうと10年ほど前から活動している。代表の塩川富士夫さんは、地球規模のグローバル化や地域経済の空洞化が進む中で自問自答し、エネルギーの地域の中での循環が最善策と考え、平成20年に7人で「バイオライフ」を立ち上げた。「国産で、地元産の油を作れば変わるかもしれない」と考え、国内自給率を下げている食用油に注目し、関東の気候に適した菜種「キラリボシ」を用い、つくば市内の研究所から種の育成権のお墨付きをもらって、龍ヶ崎の耕作放棄地で栽培を始めた。製油製品は、人体に有害なトランス脂肪酸がない「キラリボシゴールドオイル」と名付け、すり終わった油粕は、家畜の飼料として再利用されている。この「地あぶら」は、料理体験教室等を通して普及を図っており、今後は地域の雇用創出や若手の育成にもつなげていく計画である。



# おばあちゃんの生家から広がる人の縁

NPO法人「華の幹(はなのき)」

代表 飯塚 洋子（茨城県つくば市）

NPO 法人「華の幹 (はなのき) 」は、昔、村人の寄り合い場所であったつくば市の飯塚もとさんの夫のおばあちゃん（幹 さん）の築100年の生家を地域活性化の拠点にしようと古民家再生に汗を流している。飯塚さんは、6年ほど前「おばあちゃんの家を再生して活用しよう」と考え、手芸や工作教室などのイベントを行い、平成23年春に仲間5人と「人々が交流し笑顔の大木に華が咲くように」、また「おばあちゃんがいつも見守ってくれるように」と願い、「華の幹」と名付けた。コンサートや地区の伝統行事「どんど焼き」などには人々が集い、着実に地域に溶け込んでいった。2年前には、能面師荒昌二郎さんの協力を得て能面展を開催した。また、観世流能楽師らの出演が決まり、メンバーが独学で能舞台の仕組みを学び、廃材で手作り能舞台を立ち上げるなど、「みんなが笑って交流しよう」と古民家の幹にはたくさんの人の縁が集まっている。



# 筑波大学生の力を生かした地域密着型復興支援

## T-ACT 企画「Tsukuba for 3.11」

代表学生 福井 俊介（茨城県つくば市）

学生団体「Tsukuba for 3.11」は、平成23年4月から運営メンバー5人で活動を始めた。つくば市は、東日本大震災による被害の程度は東北地域に比べ軽易であったが、多くの所で緊急時の対応の不慣れや将来的な大災害に対応できない実態があった。そこで、学生として出来るところから解消しようと、最初は、東北地方の現地で活動し、他団体のボランティア活動計画の紹介や活動報告会などをメインに行った。その後、福島の子ども達をつくば市に招いてのサマーキャンプ、ボランティア経験者による交流会、学園祭での展示などを行った。現在は、気仙沼市、いわき市、つくば市に拠点をおき、がれき等の撤去作業やつくば市に避難している人達を招いての芋煮会などを行い、筑波大学、社会福祉協議会とも連携して、ボランティアの受け入れ・送り込み体制を構築するなどその活動内容を充実させている。



# 高校生によるラオス学校建設への協力、支援活動

高知市立高知商業高等学校生徒会

代表生徒 細木 優夏(高知県高知市)

高知商業高等学校の生徒会を中心としたラオスに学校を贈る国際ボランティア活動は、21年目を迎え、地域とも連携を図りながら、学校全体が参加できる仕組みになっている。校内に模擬株式会社を設立し、生徒、教職員、保護者が株主となって出資しており、毎年、代表生徒がラオスを訪問し、出資金をもとに織物などの伝統商品を購入して地元高知市で販売している。そして、その利益は、配当とともに出資金を株主に返金し、残金をNGO団体高知ラオス会を通じて学校建設活動に充てており、これまでに7校の学校建設に協力している。

このような特色ある教育を生かした生徒会の活動は、高校生のアイデアを駆使したエコバッグや扇子などの商品化を含めた国際交流へと発展を見せている。



# 木製義足を作り続ける職人

菊池 豊（東京都世田谷区）

菊池さんは、木製の義足を作り続ける国内では数少ない職人である。終戦直後に創業した東京都世田谷にある会社の工場長を務めている。

木製の義足の制作では、木や関節に使う金具の切削と接合、ボルトの微妙な固定具合など経験と勘がものをいう。菊池さんは、使う人の気持ちを大切にしたいとの思いから十分に話し合うことも重視している。現在、義足は金属製やカーボン製が主流であり、木製を制作し、全国の義肢装具士に納入している会社は2社しかない。

菊池さんは「失ってつらい思いを一度した人に、再び『別の足』に取り換えてもらうのは申し訳ない。使い慣れた人が使いたいという限りいつまでも作り続けたい」と語る。



## ご当地紙芝居で心の復興後押し

中谷 奈津子（神奈川県鎌倉市）

中谷さんは、放送局のアナウンサーから紙芝居師になって5年、「市販品より自分で描いた紙芝居の方が、子どもが笑ってくれる」、「笑顔が出る瞬間、人はほっとするんです。大変な状況下にあるほど笑顔は特別なのだと教わりました。」と語り、厚木市の童歌などを素材にした創作紙芝居のスタイルを確立し「ご当地紙芝居師」として活躍している。

東日本大震災から10日後、茨城県の避難所での上演を皮切りに、土、日に自費で東北へ行き、紙芝居を披露する生活を続けてきた。現在も月に一度は、被災地を訪れ、民話などを基にした「ご当地紙芝居」を上演し、心の復興を後押しする活動を続けている。また、今年5月には「今、被災地では『忘れられること』を恐れている。紙芝居を演じることで、被災地の今を届けたい」と紙芝居や写真などによる作品で活動報告展を地元鎌倉で開くなど開いている。





# 言葉の橋渡し 心を添えて

問屋 正勝 (神奈川県)

問屋さんには、大手電機メーカーに勤務していた20代のときベネズエラ、コロンビア駐在時に会ったスペイン語を生かしたいと考え、退職後、NPO法人「多言語社会リソースかながわ」の「医療通訳者派遣システム事業」に応募し、スペイン語医療通訳スタッフに登録された。以来、ボランティアとして、自治体の要請も含め7年間で約500回の医療通訳活動をしている。医療通訳は、正確な通訳や専門的知識といった技術面も大切だが、患者の心に配慮する工夫、気遣い等も重要である。時として死期の宣告を通訳しなければならない場面もあり、人間的に大きな器が要求されるなど、問屋さんには多くのケースから通訳の仕事の重さを自覚したという。また、「やるからには、千回はやりたい、ようやく半分まで来た。」「通訳としてうれしいのは、医師から通訳がうまくいったと褒められ、患者からも感謝されたときです。」と語り、精力的に医療通訳活動を行っている。

**医療通訳者**



「医療通訳者」は、医師と患者の間で言葉の橋渡しをする役割を担っています。正確な通訳だけでなく、患者の心に寄り添うことも重要な役割です。

**医療通訳者になるには**

「医療通訳者になるためには、決まった条件があるわけではありません。医療通訳者としての活動は、医療機関やNPO法人の募集要項やボランティアの募集要項を確認する必要があります。また、通訳活動を行う際には、医療機関のルールやマナーを守ることが大切です。」

**医療通訳者の役割**

医療通訳者の役割は、医師と患者の間で言葉の橋渡しをすることです。正確な通訳だけでなく、患者の心に寄り添うことも重要な役割です。また、医療機関のルールやマナーを守ることが大切です。

**医療通訳者の仕事**

医療通訳者の仕事は、医師と患者の間で言葉の橋渡しをすることです。正確な通訳だけでなく、患者の心に寄り添うことも重要な役割です。また、医療機関のルールやマナーを守ることが大切です。

60 暮らし 2015

**医療通訳者**

「医療通訳者」は、医師と患者の間で言葉の橋渡しをする役割を担っています。正確な通訳だけでなく、患者の心に寄り添うことも重要な役割です。

**医療通訳者になるには**

「医療通訳者になるためには、決まった条件があるわけではありません。医療通訳者としての活動は、医療機関やNPO法人の募集要項やボランティアの募集要項を確認する必要があります。また、通訳活動を行う際には、医療機関のルールやマナーを守ることが大切です。」

**医療通訳者の役割**

医療通訳者の役割は、医師と患者の間で言葉の橋渡しをすることです。正確な通訳だけでなく、患者の心に寄り添うことも重要な役割です。また、医療機関のルールやマナーを守ることが大切です。

**医療通訳者の仕事**

医療通訳者の仕事は、医師と患者の間で言葉の橋渡しをすることです。正確な通訳だけでなく、患者の心に寄り添うことも重要な役割です。また、医療機関のルールやマナーを守ることが大切です。

59 暮らし 2015

**医療通訳者**

「医療通訳者」は、医師と患者の間で言葉の橋渡しをする役割を担っています。正確な通訳だけでなく、患者の心に寄り添うことも重要な役割です。

**医療通訳者になるには**

「医療通訳者になるためには、決まった条件があるわけではありません。医療通訳者としての活動は、医療機関やNPO法人の募集要項やボランティアの募集要項を確認する必要があります。また、通訳活動を行う際には、医療機関のルールやマナーを守ることが大切です。」

**医療通訳者の役割**

医療通訳者の役割は、医師と患者の間で言葉の橋渡しをすることです。正確な通訳だけでなく、患者の心に寄り添うことも重要な役割です。また、医療機関のルールやマナーを守ることが大切です。

**医療通訳者の仕事**

医療通訳者の仕事は、医師と患者の間で言葉の橋渡しをすることです。正確な通訳だけでなく、患者の心に寄り添うことも重要な役割です。また、医療機関のルールやマナーを守ることが大切です。

61 暮らし 2015

# 音楽を通じた日本とモンゴルの交流拡大をめざして

阿部 渚（東京都町田市）

馬頭琴奏者 NAGISA（阿部）さんは、モンゴルの伝統楽器で「草原のチェロ」とも呼ばれる馬頭琴（ばとうきん）に興味を持ち、本場モンゴルの著名な指導者、パトチョローン師らに学び、2008年、第1回国際馬頭琴フェスティバルで優秀賞を受け注目を浴びた。現在、日本、韓国、スペイン、モンゴルなど世界各地で演奏活動を続けており、駐日モンゴル大使も「モンゴルの誇りである馬頭琴を世界に普及してくれている。」と感謝の言葉を惜しまない。

NAGISAさんは、ライフワークとして国内の病院、老人ホーム、各種施設、学校等で慰問活動を行っているが、数年前からモンゴルでは音楽教育が十分に行えていない実情にあることを知り、中古ピアノの再調律や運送費などについて仲間の協力を得ながら、今年から公立小学校にピアノを毎年10台ずつ寄贈したり、調律師や修理職人を育成したりするなど音楽を通じた日本とモンゴルの交流拡大に努めている。



# 子供達に生きた科学を

芳賀 和夫（茨城県つくば市）

芳賀さんは、平成9年に停年退職後、子供達のために「易しいサイエンス」、「オリガミクス（紙を折って数理を楽しむ）」などの科学教育活動を行ってきている。また、平成11年に子供達に生きた科学を体験させたいとの考えで「サイエンスキッズ」を立ち上げ、主に茨城県内から集まる子供のグループで学校が休みの日に、県内各地で自然観察や様々な科学体験を行っている。クワガタと遊ぼう、ショウジョウバエの観察などの室内での講座はもとより、研究機関や筑波大学との連携による体験学習、茨城県内外におけるフィールドワークなど様々なプログラムを毎年約20回にわたり展開している。指導に際しては、各研究機関の職員、筑波大学生、フィールドワークの各地域のボランティア諸氏からの協力も得ている。このように、参加する子供達だけではなく、スタッフ諸氏にとっても刺激的な「生きた科学」の啓蒙活動を続けている。



## 地域での一人暮らしの方やお年寄りの 見守り活動

藤原 啓乃（東京都北区）

藤原さんは、長く赤羽台団地に住み、自治会長を務め、地域住民から信頼を得るとともに住民のお世話を続けてきている。10年ほど前から、団地を含めて地域の高齢者が増え、しかも高齢者は、今後も故郷であるこの地域に住み続けることを望んでいることがわかった。そこで、藤原さんは、様々な生活環境で暮らしているお年寄り達が孤立することなく安心して自立した生活を継続できるよう4年前から、5人ほどの仲間とお年寄りの話を聞いてあげるなどの相談活動を始め、2年前からは、区役所の協力も得て、団地の集会所を使用してお年寄りの相談会や折り紙、絵手紙などの講習を毎週行っている。現在は、毎回60人ほどが参加しており、お世話する仲間も増えて映画会や相談会を開催するなど、藤原さんを中心とした地域での日常なお年寄り達への見守り活動は、着実に根を下ろし広がりを見せている。

